

高校今昔、同期会・同窓会

水沼文平
(前中央教育研究所所長)

一昨年の7月、故郷仙台に戻り高校時代の旧友との交流が始まった。私が県立N高校を卒業したのは昭和40年3月で新制になって17回目の生徒であった。N高校は仙台城の郭内にあり、戦前は陸軍第二師団に隣接していた。軍人の子息が多く、勢い陸軍士官学校、海軍兵学校に進学する生徒が多かった。最後の海軍大将井上成美も卒業生である。私がN高校に在学していた当時は軍国時代の反省から、平和・自由・民主を唱える教師が多く、戦前の卒業生のことは全く知らされなかった。井上成美の存在を知ったのは遙か後のことであ川弘之著「井上成美」に出合ってからである。ただし、柔道の三船久藏のことは誰でも知っており、戦前からの「文武一道」が校是として引き継がれていた。

昨年の9月、同期生数人と母校の文化祭を見学に行った。校舎を立て替えたとはいえ、私たちの時代の原型をほぼ留めていてたいへんなつかしく思った。文化祭は女子生徒（12年前から共学になった）が呼び込みに懸命になっているのが印象的だった。しかし、どこに行っても食べ物と飲み物の出店のようなものが並んでいるだけだった。ある女子生徒に「文化部の一年間の研究成果はどこに行ったら見られるの？」と聞いたら不審な顔をされただけで返事は返って来なかつた。一通り回ってみて一部に研究報告をしているところがあったが、私が50年前に経験した生物部や新聞部の同期生が、私に語りかけてきた熱気のようなものを感じ取ることができなかつた。後で友人に聞いたらかなり前から大学からの影響で高校の文化祭は様変わりしたことであつた。応援団の部屋があり団長は女子生徒で、シックな黒い服に身を包みリクエストに応じて凛々しく「凱歌」を歌ってくれた。弊衣破帽、汗臭い時代と異なりソフィスティケイトされ、あれほど大騒ぎをした共学問題であるが、実施されて良かったと実感した。文化祭の様変わりもさることながら同窓会の部屋にはお母さんたち（保護者）が詰め掛け我々OBをコーヒーなどでもてなしてくれた。ライバル校との野球の定期戦でも彼女等が菓子などを配っていたとも聞いている。私たちの頃は入学式、卒業式でも両親が学校に来ることなどはなかつたし、来て欲しくもなかつた。もし来るとなれば問題を起こし処分されたときであり50年という時間の隔たりを感じた。

さて、同期の話を総合すると、大学入試は私たちの頃と同じく、依然として「知識・技能」を中心としたものである。学校教育に求められる能力として「知識・技能」と同時に「意欲・関心・態度」延いては「非認知能力」の育成のほうが大事だと多くの人が考えている。非認知的能力とは、例えば、目標に向かって頑張る力、他の人とうまく関わる力、感情をコントロールする力、老人や弱者を労わる気持ち、などである。私はN高校では運動部に所属し、忍耐、協同、抑制することを学んだ。社会に出てこのような「非認知能力」が最も求められ、私の生き方にも大きく影響したと思っている。

教師であるが、私たちの頃は戦前からの、それも母校出身の古株教師が数人いて名物教師になっていた。昇進も望まず退職まで居続け、嘱託として残る教師もいた。よほど母校が好きだったのであろう。その中で、眠っている生徒にチョークを投げつけ命中させる名人がいた。ところがある先輩が突然頭をもたげ飛んでくるチョークを見事に受け止めそれを投げ返した強者がいたというレジェンドが残っている。勤務年数が長いだけに兄弟や伯父まで教えた教師もいて「お前の叔父は……、お前の兄は……」と説教をされ頭を搔いていた同期生もいた。それでは現在の教師といえば、また聞きだが、進学校では受験指導を中心に生活指導も十分に行われているようだが、50数年前の恩師の顔を浮かべながら、予備校のカリスマ講師を理想とするような教師であって欲しくないと思った。

N高校の同窓会は平成32年に創立120周年を迎える。同窓会の活動は活発で北海道から九州まで19の支部、ニューヨークとローマにも支部を持っている。県庁や市役所といった職域にも支部がある。会員数は約13,000名、年会費は3,000円で、寄付金を含め年間900万円近い会費が寄せられている。行事として、記念講演、評議員会、同窓会報の発行、PTA同窓会合同懇親会、総会などがある。このPTA同窓会合同懇親会に一度参加したが和気あいあいと進行し皆満足気だった。地方の進学校がもつエリート意識から来るのか多分に排他的であり、強いネットワークで結ばれている傾向が見られる。仙台に戻った頃、長年異郷に暮らした者と在住者との間に意識面でかなりのギャップがあることを感じた。

さて同期会であるが、前々から懇親会はやっていたようだが、私が仙台に戻った年に新規の同期会が始まっていた。単なる飲み会での懇親だけではなく、同期生2名に講演をしてもらうという新企画であった。1月、5月、9月と年に3回開催、今年の5月で7回目を迎えたので、14名の同期生が講演をしたことになる。現在の会員数は約80名（同期生は350名）で、5月の参加者は36名であった。私は2回目からの参加となったが、講師として体外受精の専門家であるH君、民俗学者のY君、四ツ谷用水（政宗が立案した上水道）の研究者のA君などの話が印象に残っている。講師は往々にして「功成り名遂げた」人に成りがちであるが、高校を卒業して五十有余年、それぞれの道を歩み、学友に聞いて欲しい、伝えたいといったことがあるはずである。講演時間は一人40分としているが、40分は長すぎる、もっと短い時間なら話せるという人にショートタイムのスピーチも検討している。

同期会開催の前後の2回幹事会をもち、同期会運営に関する諸々の打ち合わせをしている。また開催案内に返信はがきを同封して出欠以外に近況とメールアドレスの記入欄を設け、55名からメールアドレスの連絡を受けた。この狙いは郵便を使用しての連絡には費用と手間がかかるので、ネットを活用して効率化を図りたいということである。同期会の案内、集合写真、幹事会議事録、近況、訃報、同窓会の動向、ライバルとの定期戦の結果などをメールで連絡・報告をしている。その場合、広報担当のM君の一元管理として個人情報を保護するために宛名には「BCC」（ブラインド・カーボン・コピー）を使用、会員のEメールアドレスが表に出ないようにしている。学友から会員に流して欲しいものがあればM君に送り、会員のインターラクティブな交流を実現している。メールの活用がスタートして気づいたことは同期生の距離が縮まったことである。メール上で50年振りに再会し、感極まった同期生もいてネット社会の有効性を実感している。

私たちも72歳の年を迎え「林住期」のただ中にあるが、この同期会に意味をもたせたいと考え

えている。目標として「余生を愉快に、友情を深め、母校に貢献できる同期会」というのはどうであろうか。甘いも酸いも舐め尽くした私たちは少年時代とは異なる「水のごとき」交りができると思うし、また、在校生と膝を接し、彼らの「夢、希望、挫折、失意」など「アドレッセンスの深刻な悩み」に対して、私たちの長い人生経験から、何かアドバイスができることを願っている。